文久元、一二　藩主信順、侍従に任ず。
三、四　久慈の人平屋大助、七戸甲子鉄山を開堀せんとす。
元治元、七　藩主信順、京都警備を命ぜらる。
元、一二　八戸町大火、廿三日町より出火、荒町、十三日町、三日町、表町、廿六日町、十六日町、六日町、朝日町、十一日町、寺町、横町、裏町、大工町、に及び家屋二百九十一軒を焼く。
慶応元、八　久慈冨蒲沢に新に鉄山を開かんとす。
元、一二　三戸旧代官所構内に文武場を建つ、婦人立入を禁ず（太田家筆記　嶽部五郎小史）
二、六　久慈大野の熊吉、八戸朝日町常吉、孝子として青縞二貫、終身藏米一駄を賞せらる。
二、九　蛇口胤年死す、五十七才、八戸の駒士、通称与八郎後伴藏、文武に通じ易経全巻を暗誦す、徳川氏の批政を憂い藩主に節倹を献言、新渡戸伝と親しむ（蛇口胤年伝）その子謙吉、
南学を修めんとし後わが家を師範学校となすこと四年、胤親（謙吉）また南文社を設け少年夜学の所とす。
（八戸南見録）
三、四　国産真綿を朝廷に献上せんことを請い允さる（鈴木石金吾日記）

（青森県史等による）

経塚の発掘
横川敏三
第39号

経塚の発掘

横川敏三

経塚の発掘は、和賀郡東和町に在る、右社谷内神社の境内、同社を囲繞せる、堂山と称する、小山脈の一峯チョーが森に於て行はれしものにて、該経塚の構築の模様、並に出土品に就き、考究して、参考に資せんとするのである。

一、場所　和賀郡東和町谷内字一地割一番地所在谷内山神社（旧郷社）境内、同神社を囲繞せる、堂山と称する山脈の一峯経ケ森

一、位置　同神社の東北約五〇〇米、標高約三八〇米の小山脈の突端に近き場所同小峯は一名経塚石末チョンガ森、或はチョウガ森と称され、

其の一点に川石（玉石）交りの高さ六〜七米、広さ二〜三米の土盛りの塚があった、山の上に、川石のあるは、不思議である、何か埋蔵されて居るに相違ないと、取沙汰されて居た、通々昭和三十四年秋、氏子有子の会合の折り、チョウガ森は、或は「経ケ森」の転訛にあらずやとの説起りしより、一部里人の好奇心を唆られしか、遂に昭和三十四年十一月廿九日数人相謀り、何等の手続を履まず、且つ無計画に、乱暴に発掘せしため、種々問題を惹起し、出土せし経筒も、写真の如く砕かれ、且つ経塚の構築の模様形式等も、明らかにする事も出来ざる始末となった、尚、当事者に質問せしも、要領を得ざる事多きに依り、其跡を再発掘し、調査するの、要ありとして、東和町文化財専門委員の手により、岩手大学の草間教授指導の下に、翌三十五年十一月二、三日の両日に、実施せられたのである。

其の結果、写経を納め、埋蔵せしと、思わるゝ経筒らしきものは、先きに出土した事であったが、其他の状況より、チョウガ森は、「経ケ森」の転化にして、該土盛は、経塚なりし事が、明らかになった。

此の塚は、経典を納めし経筒を、埋蔵するに当り経筒を中心にして、其の周囲を、扁平なる山石（片麻岩の砕片？……）を三重に並列し、経筒を防護するの形態をなし、大きさ約五〜六米の径となし、経筒の上には、木の葉形の稍平らかな自然石を載せて蓋となし其の上に前述の如く、土石を盛り上げ、塚を

構築せる事が判明した。此の経塚より次の如き出土品があった。

一、経　筒　一個（石質凝灰岩）

一、銅鋳銭　一五枚（一回の発掘に八枚再発掘に一〇枚計一八枚が表の通り）

一號経塚より出土銅鋳銭（形態は明治末年に使用せし寛永通宝に類似す即ち二厘六明銭）

鋳銭面文字	出土員数	国名	皇帝名	年號該当年数	寸面㎜	備考
開元通宝	二	唐	玄宗	七一三～七四一		
淳化元宝	一	宋	大宗	九九〇～九九四		
景德元宝	(一)一	〃	真宗	一〇〇四～一〇〇七	二五㎜	
天禧通宝	(一)二	〃	〃	一〇一七～一〇二一	二五	
天聖元宝	(一)三	〃	仁宗	一〇二三～一〇三一	二四・五	
熙寧元宝	(一)三	〃	神宗	一〇六八～一〇七七	二二・五	
元豊通宝	一	〃	〃	一〇七八～一〇八五		
元祐通宝	(一)一	〃	哲宗	一〇八六～一〇九三	二三	
紹聖元宝	(一)一	〃	〃	一〇九四～一〇〇〇	二三	
慶元通宝	一	〃	寧宗	一二〇〇～一二〇〇		
皇宋元宝	一				二三・五	皇帝名も年号も不明従って鋳銭時不明なる宋字銭を見れば宋朝の鋳造銭にして同時代に使用せられしものなるは確かである。
聖宋元宝	一					
計	一八					

二號経塚

此の二号経塚は、一号経塚より南西約五米の箇所に稍小高く、川石が並列しありしより、或は何等かのために、川石を置きしにあらずやと思考し、之を

取り除きたるに、其下に平らかなる石があり、之を取り去りたるに、更に石がある所より、愈々怪しみ之を取り除き又次の石と云ふ具合にて、都合四枚ばかり取除きしに、数個の石を組て造れる石室の如きに堀当てしが、其中に彭軟なる土、充満しあり、之を取り出せしに、不整五角形の石室あり之も同じく土が入りありしを取り除きしに、写真の如き、白磁の壺の横たわり格納しあるを発見し、その頭位に当り方鏡一面を発し、次で銅鋳銭一枚を発見した。壺には土が充満していたが、別に之と云ふものを発見する事が出来なかった。

尚、石室の底下を検するに、真下の扁平なる底石の下に、数個の磯が並び、其の下に更に扁平なる石あり、尚、其の下に数個の川礫が並び、其の下に更に大なる平石が置かれて居り、其の下は山地肌となって居る事が確かめられた。

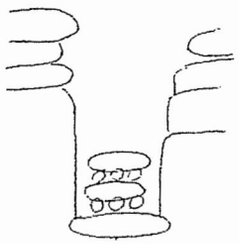
是を以て見るに、当二号経塚は、表面の石の外に土中三重に石を重ね、其の下に石室を設け、其の下に更に三重の石と、二重の川小石をはさみ重ねたる装置であり、上の方は、壺の入り居たる石室の直く上の、天井石の上に、尚三段ばかり、平石を重ねてあったので、地上より全体の深さは、約一、二米もあるやに思われ、最も吟味して構築せし経塚である事が確認された。

二号経塚よりの出土品

一、白磁の壺　一ケ

一、方　鏡　一面（一五・六㎝四角にして頗る明らかにして少しの曇もなし）

一、銅鋳銭　一枚（別表にあり）



二號経塚の見取図
（草間教授による）

壺総高　二五、五

口径、外径二、五　内九、七

頸高　四、同周二七、五

最も彭れた所周五八、（高一九、三の所下台、

一、五周二六底径八、三外欠けし所五分の二位

両端欠片はなし

方面裏面銘入

湖州真石家念二叔照子

三号経塚

該経塚は、谷内神社に登る参道の左側（本殿に向って）三米ばかり距たりし、叢林の籔の中にあって二〜二、五米の広さ、高さ三〜五米ばかり盛り土されてあった所より、里人伝うるに、明治初年廃仏棄釈令の、実施せられし際、ミイラか仏具の、埋匿せし所なりと、噂させらるゝ所なりしが、此処にも亦磧石の、散乱しある所より、此の如き、風評の立ちしものならんと、思考せられしが、発掘才二日目に発掘せし所、多数の磧石出土せしが、尚、六米ばかり掘り進みしに、山肌の土となりて、何等得る所なかりしが、磧石の多数出土せしと、七枚の銅鋳銭を発見せる所より、此の塚は一字一石経塚であらうと推定されるのである。

後日或は出土小石に写経したるこん跡を認むる事もやと思い調査に出向きせしも、数個の山石を発見せしのみにて、磧石は殆んど埋め返されて、発見するを得ず、従って一石一字の経塚なりと断定する事得ざりしも、一石一字経塚に相違ないと推定されるのである。

三號経塚よりの出土銅鋳銭次の通りであった。

三号経塚より銅鋳銭

鋳銭面文字	出土員数	国名	皇帝名	年号該当西記	寸法 mm	備考
咸平通宝	一	宋	真宗	九八〜一〇〇二		
嘉祐元宝	一	〃	仁宗	一〇五六〜一〇六三		
監寧元宝	一					
元豊通宝	一					
紹聖元宝	一					
嘉泰通宝	一	宋	寧宗	一二〇一〜一二〇四		
皇宋通宝	一					
計	七					
祥符元宝	一	宋	真宗	一〇〇八〜一〇一六		

「二号経塚の出土銭の多きは不思議であり、此の銅銭は祥符元宝とあるが、宋朝の年号に真宗帝の在位中に「大中詳符」の年号がある。多分其の年号中鋳造されたものと思われる。

経塚の起源

経塚は、我が国独自のものらしく、古来、経塔、経筒、経石、経瓦、などを納めて築きたる塚を経塚と称し、全国に散在して居る。

塚に納埋した経筒は、銅、石、陶器などにて、丸形の筒を造り、法華経などを納め、蓋を固く封じ地中に埋め置きしものにて叡山の如法堂に始まるといわれて居た。

『叡山要記（如法堂銅筒記）』に「右常院住僧覚超等奉守護此如法経如護已命如護眼睛而作此念法住有限可恐将来堂塔破壊無人修理之時恐此経文混泥土為邪見人所軽乎諸僧会議云鋳銅一口理置堂裏誡末寺住僧令移納此経積土石成山缶待慈尊出世豈非勝術乎云々」（仏教大辞典）』

是を以て見るに、元来は経典を経筒に納め永久保存の方法として、地中に納め、末世慈尊の出現を、期待せしに、起源しと雖も、後世に至りて、民間の信仰となりては、

「祈願のために、手写したる経巻を納めたる筒にして其の多くは青銅製なりしが、稀れには鉄製土製のものもあり、円筒形のもの多く、蓋あり、大低高さ一尺内外、外面には銘文を鋳出し、或は刻書し、之を土中に埋め、塚を築きて経塚と称した」（大言海）（資料其一、其八の六、七、八図）

而して単に筒に納めしのみならずして、更に石櫃に納めて埋めし如き厳重なものもあった様である。（資料其一、其八の四図）又直に石筒に納めた侭なのもあったらしい（谷内一号経塚資料其の八の六図）尚、叮嚀にも、経巻を錦のふくさに包みて、納めたるかに、想像さるゝものさえあった様である（資料其の八の七図の銅器）

以上の如く、石櫃、石筒、或は銅器と共に、磁器陶器をも用いられし事である。

磁器の壺としては谷内の二号経塚、資料其の一其の七の斧塚の出土品と共に陶器の瓶を用いられし事である。（資料其の七の二、三図、其の八の三、五図）

経塚構築の時代

次に経塚の構築は、何れの時代に行われしやと云う事に就いては、筆者の知れる範囲に於ては、何れの経塚に就いても、年代的に証すべき、文献に接して居ないし、且つ其の起源と目される叡山記にも、其の時代を誌されて居ない。或は経筒等に刻記されしものあるかと留意調査しても未だ発見して居ない

資料其の一に博物館の正史課長高橋健自氏は「時

代は藤原時代切言すれば、摂政時代に属するものと被存候」とあるを以て見るに、摂政時代に初まり、鎌倉、足利時代にかけて、盛んに行われしものと、推定して誤りはないと思われる。

尚、谷内経塚並に資料其の一、其の七は最も初期に属するものであらうと思われる、

副納品（？）

叡山記には、経典を埋納する事を記され居るも、其の他の副葬品と云うべきか、副納品に就いては、何等記さるゝ所なきも谷内の経塚並に資料其の一、其の八に種々の副物を見るのは何故であろうか、（其の他の経塚には有無は明らかでない）其の理由も有して居ないが、各資料に依れば、

一、鏡　（谷内二号経塚、資料其一、其四、其八）

一、刀　剣　（資料其一、其八）

一、銭　貨　（谷内経塚）

右各の副納品皆それぞれの意味する所があると想像せらるゝも、今、是を明解し得ざるを遺憾とす。

刀剣は古来死人のある時に其の床上又は枕頭に置きて、魔除とせしと云い、今もなお、行われ居るを以て、其れ等の意味するものにあらずやと思わるゝも明らかでない。

銭貨は谷内経塚以外に、発見されて居ないが、是は賽銭であるやに考えらるゝも、或は供餼であったかも知れないと思われる。

鏡に就いては何を意味するかは、筆者は詳かにして居ない、

補遺

谷内経塚より、白磁の壺並に方鏡の出土せし當時各新聞誌に、経塚発掘の記事が掲載されしが、其の記事に、方鏡は、中国湖州産、白磁の壺は、宋窯、（中国宋時代製品）なりと報ぜられしが、其の時、筆者の許に県内某史家より斯界の大家の説なりとして、次の様な書信が寄せられた、

方鏡は、新聞に支那とありましたが、あれは湖州鏡と呼ばれ、朝鮮のものの由、湖州の地名が、中国にもあるため誤られるらしいとの事、日本にも、相当同種のものが、保存されて居る由。

壺は宋窯白磁とあり、写真だけでは判らないが、一寸の感じが、宋窯としては硬い、尚、宋窯としても、日本に沢山ある由

（私信なさを以て氏名は容して貰います）

尚資料其の一の壺につき高橋健自氏（前出）は次の様に申し越されて居た、

「上古未行われし、鼠色硬質の窯器にして、朝鮮の製法を伝えしもの、一部の学者の祝部土器と云うものと同質に属す」

と申し越されて居るが、資料オ七及び、谷内の出土の白磁と相違するや、或は資料其の七の四図の陶器と同質のものとなるやは、明らかでない参考迄に記す、

次に資料オ七の白磁の壺に就いては、復元者の小岩末治氏は「中国の製品ならん」と云われしと伝えられて居る、

谷内経塚の出土品、資料其の一、其の七の壺にしても、全部取り揃えての鑑定ではないので判定する事は不可能である、依て各説を紹介するに止める。

尚筆者は谷内の出土品と資料其七の壺とは、極めて近似し居るも、何処か異なる感覚があるやに、思われる、

陶磁器のふちの欠損に就いて

以上の出土品につき観察するに、怪訝に堪えないのは、陶磁器の容器の満足なるもの一個もない事である。谷内及び高松の磁器に於て（殊にもそれの如きは、口縁部は全壊して居る）陶器のそれに於ては資料其七の二器、其八の二、三、五図の三器は何れも、口縁部は、全部欠除して居た、

是を以って見るに全部が全部、不注意なる、発掘の結果なりと云う事も出来得ない様にも思われる、之に就いて、東北大学の亀田教授は「陶磁器の、納経の容器は必ず口縁の一部或は全部を欠け居るを例とし、完全なる物は発見する事得ざるものである、但し其れは何の故であるかは詳らかでない」と云われしと知人某氏が記されたので、陶磁器の経巻容器の殆んどが、口縁部の欠除し居る事に不審を抱ける際として、或はかゝる事もあるやと、首肯されしも、其の理由を明らかならざるは遺憾である。（但し資料オ一の壺は口辺欠除し居るや否やは明らかでない）

併し乍ら前掲の叡山記に依りて、経典保存の目的を以て経筒に格納埋蔵された事は、理解し得たとしても、一石一字の経塚も、同一目的を以て築造され

しものなるやと云う事は出来ない、是は前記の目的にあらずして、二義的のものであると考えられて、即ち大言海の解説の如く、一石に経典の一字を書き誌し、之を集積して、塚を築造せしは、

一、菩提供養
二、祈願成就

等の為であったと思われる、そして之等に書写せし経典は、主として、法華経らしく、稀には、磐若経もあったであらうと思われる（谷内三号経塚資料其二、其三、其四、其五）

是等は主として、扁平な川原の小石を拾い集め写経し、集積埋蔵し、土石を以て之をおおい、塚とするを例とし、大低は其の上に、標識として、自然石を置くか、建て置くを例とした様である。

稀には、経巻を納めた容器の、周囲や上に、一石一字の写経した小石を、顛充し、其上に土石をおおい、塚を築造せし例もある、切言すれば、複合式経塚（或は復式経塚）と称する事が出来る、形式のもあった様である、（資料其七経塚）

◎材料の凝灰岩は東和町内には全然産出しないので、種々調査の結果、北上市の卧石（ふそす）と更木部落の南の山脈せど長根より産出する石にて、俗に炉石（ろ石）と称し、古来炬燵炉或はこんろ等に造り居たるものである、資料其の一の石櫃も、曾て奥羽史談に、伝称子安地蔵尊像尊の材料も、何れも同地より産出せしものなる事が判った。

二号経塚の壷の格納に就て

此の壷は、中央に立てゝ埋蔵せしも、地震其の他の震動に依り横転し、其の際口縁部が、側石にあたり欠落せしものなりと、一応考えても、石室の高さ面積、其横たわり居りし位置より見る時に何処か、不自然な点があり、且つ厚く、相当硬質の磁器が、震動横倒の際、側石に、餡接欠落せりと、思われざるのみか、石室内の土を、篩い落し、細心の注意を払い、調査したるも、一小破片すら、発見し得ざりしは不審であり、併せて、石室の三角形をなせる、空虚部に、玉石五箇を顛充し、壷の移動を防ぜぎしやと、思わるゝ点を考慮して、次の様に思考する事が出来ないであろうか、

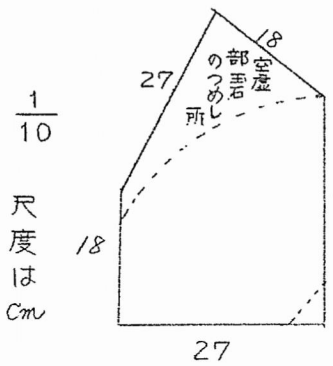
壷は亀田教授の説の如く、何等かの理由に依り、故意に約五分の二の口縁部を欠き落し、大破片は取揃え微細片は、棄てゝ壷は横に格納し、余りに転移

せぬ様に、広虚部に、五箇の玉石を、顛充したものであると、

次に発掘時の十一月三日の夜、関係者の懇談の際、筆者は、

「此の二号経塚は、特殊なる構造にて、研究資料として、誠に得難きものなるを以て、其の発掘個所に、木柵を施し、立入りを止め、土砂の崩壊を防ぎ且つ内部の構造を、窺知し得た様に存置する様に」と提言し置きしも其事なく、埋没し去りしは、誠に心無き処置であったと、惜しまれたのである。

壷を格納した石室
点線は壷の高さのため



1/10 尺度は cm

資料解説

一、資料其一、態野経塚跡
史蹟名勝天然記念物
調査報告（大正十三年）委員伊能嘉矩
〃 其二、山谷観音堂及経塚　同　上
〃 其三　山口村経塚に関するもの　同　小田島録郎
〃 其四　飯岡村に於ける経塚　同　小笠原謙吉
〃 其五　狐石一字一石経塚
奥羽史談第二七号吉田義昭
（昭和三年四月二九日岩手日報）
〃 其六　七ツ森と経塚
史蹟名勝天然記念物
調査報告（大正十三年）　小笠原謙吉
〃 其七　花巻市高松経塚
昭和三十六年調査　横川融三
〃 其八　大森山経塚
山形県東根市所在

役故同弟其甲冢故業徙遺跡而改其名又三石工門代
綱也代綱自以為天至干令真綱之素志遂者誰人也吾
若忽之事必廃宣先経塚卒謀於同主則主肯諾恰好於
是以代地償之而後剪柴薪平不平以真綱所讀之妙典
収之瓶中築壇以深埋之而樹巨石就余請為碑銘余嘉
美其情志之至為之述其引由係鄙詞以充銘云

天覆不可覃　地載豈能堪
唯有一乗法　無二亦無三

資料　其七

高松の経塚

一、名　称　イ、経塚　ロ、斧塚（或は鉈鉞塚）
　　ハ、綱森
二、所在地　花巻市（旧稗貫郡矢沢村）高橋第十
　　三地割

高松村の因由として、往古松の老樹あり、高く天を凌ぎ、枝葉全村をおう、時人高松と称し、山下の村邑を、高松と称するに至った、之に就いて、次の様な、巨木伝説がある。

俗間伝説に、往古此村の山上に、一株の老松あり、高く天を凌ぎ、枝葉全村をおう、高松と名づく。其松精霊あり、祈願応ぜざる事なし、故に遠近の諸民拝趨して、歳時必ず之を祭る。

終に天聴に達し、石の鳥居を立てらる、その後いかなる仔細にや、帝廟に崇りをなすと云うことにて勅宣下りて、その松を切らしむと。

老松の生いたる跡、山に窪みて猶存せり、土民島地となせり、其時代は更に考え難し、又石の鳥居の跡も、今に残れり（二郡郷村誌）

経　塚

一石一字の経塚と云う、法華経にや（二郡郷村誌）と伝称された経塚は、今現在の観音山と俗称する峯の上に、存在して居る（標高二六〇米）それは男松女松と云う、老松の間に在て、小石に（渓川或は磧の扁平な小石）に経典（法華経の）の一字を筆写して、之を集積し、土石（小玉石）を盛り揚げ、築きしものにて、場所は山嶺の尖頭であり、且つ盛土なりし、長年月風雨に曝されしを以て、一石一字の小石露出するに至りしより、経塚なる事、何人も一見して、それと、見分けられるに依り、呼称せられし

に至りたるものと思考せられる。

大正六、七年頃、当時近村なる北成島の熊野山に於て経塚（資料其一）発掘の噂伝わるや（当高松部落より四キロ足らずである）何人あったか（今以て不明である）密かに発掘せし出土品を家に持行きしも、其の発掘せし事知りし里人が、重大問題視し、騒ぎ出せしより、発覚を惧れ、堀り出せし瓶を、観音堂の後ろに持行き、放棄しありしと云う（図形二）

数十年後の今日の推察にては、当時の事実を察知するは、難時と虽も、思うに、瓶に写経を納め、其周囲に写経せし、小石を集積し、土石を盛上げ、経塚を築造せしものであろうと思われる。

瓶に写経を納め、埋蔵し、塚を築いても、又小石に経典を筆写集積し、塚を築きても、共に立派な経塚であるのに、

前述の如く写経を瓶に納め、更に写経の小石を、其の周囲に或は上に集積して、土石を以て、之をおおい、塚を築きしものとすれば、経塚築造の特殊形式であって、之を複式（又は複合式）経塚と称すべきものではあるまいか。

◎ 斧塚の発掘

是も本北成島の熊野山経塚の噂に、刺戟され、高松部落の山田亀次郎、佐藤卯太郎、渡辺宥京等相謀りて、発掘せしものにて、当該場所は、経塚より、東約五〇〇米ばかりの所にあり（標高二四〇米）で土石を以て二米ばかり大きさに高さ一米位に土石を盛り揚げ、塚状に築きしものにて、其上に松樹生えて居たので、堀崩しには、非常に困難であった。が約一米許り堀りしに一ケの平らな自然に堀り当った是を取り去りし所に、其の周囲にぎっしり磧石を詰め、其の中に白磁の壺が納められて居たのみであって（第一図）其の中には徽様の塵が入って居たのみで他には何もなかった。

発掘者は、更に鉈や、鉞や、斧や其他何かかわったものが埋蔵されてあるのかと云う、一種の好奇心を以て、発掘した次第であったと語って居た、

其の他にすえ器らしい皿も（四図）出土したが、之は完全に堀り出されて居た。

◎ 綱森の発掘

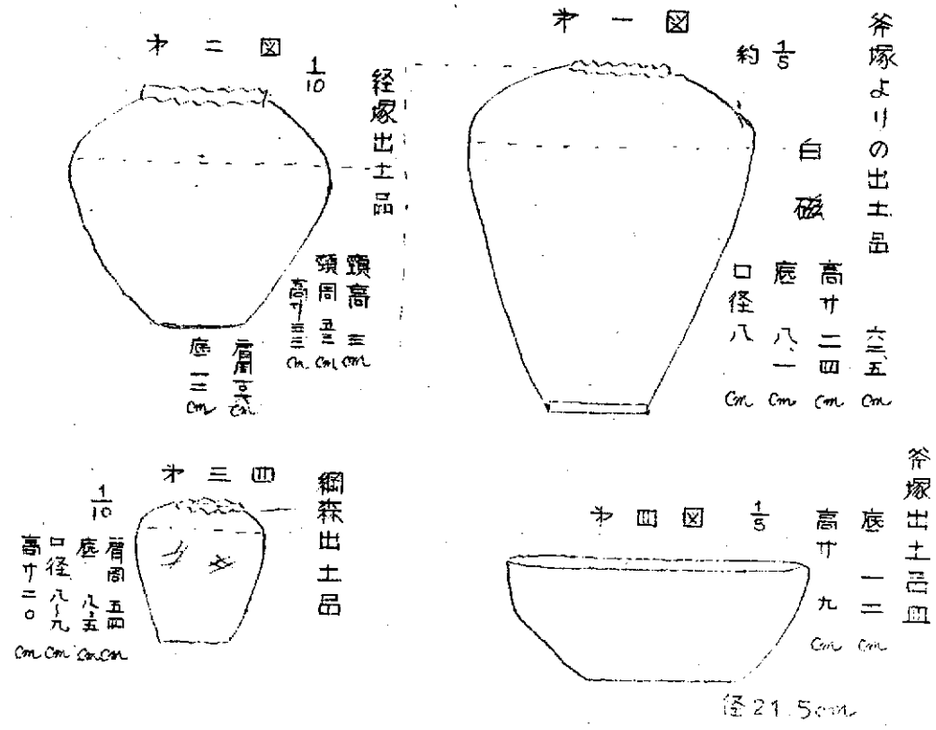
是も高松を切り倒せし時に使用せし綱を、納めたる塚を築きかれ居るに依り、綱森と称されて居る。

（矢沢村郷村誌）

此の綱森の塚は、斧塚の南々東三〇〇米許りの距離にあり、標高約二六〇米許りある。此の塚の形状は、前記の斧塚と殆んど同じであったと云う事であって、斧塚を発掘せし同人等の手に依って、発掘せられたのであったが、三図の如き小さな瓶が掘出されたのである。

附記、白磁は、相当細片に、砕かれたのであったが、昭和廿八年に、岩手県片の、小岩末治氏の手に依って、復元されて居る。

二、三図の陶器の瓶は、色彩は濃暗緑に釉薬を以て、焼き付けられて居るが、轆轤を用いられて居ない様であって、其肌は粗らく、手づくりみかではないかと、思われるのであるが、其の焼き窯と、其の製法は、識者の鑑定を待つより他はない。

此の四点の出土品は、岩根神社の奥殿に、同社の別当佐藤芳邦氏の手に依って、保管されて居る。

以上の四点の出土品を、前記三人に、分配仕様としたが、適当な分配方法がないので、岩根神社に、奉納することにして、今日に及んで居るという。